

審査委員長 隈 研吾

ガラスという素材の魅力は、それがまぎれもなくマテリアルでありながら、しかも同時に現象であるということである。その両義性にある。光にも、似たような両義性がある。光は粒子にある一すなわち物質であると同時に波動でもある一すなわち現象でもある。そんな不可思議で神秘的な建築材料を、われわれは日常的に用いている。そしてほとんどの場合、その両義性を使いこなせずに、単にガラスを「透明な素材」としてしか扱えていないという残念さ。そんな思いが、今回の課題の背景にある。最優秀案には、盲点をつかれた感じがあった。ほとんどの案がガラスばかり見ているのに対し、彼だけはガラスではなく、ガラスとガラスのスキマに着目しているからである。そのスキマに水が流れることによって、そもそも両義的であり、曖昧であったガラスが、さらなる両義性を獲得する。さらに水はスキマを流れ、さまざまなウズ、速度が発生して、ガラスの不可思議は別の次元へと到達する。実際に、どこで何がおきて、何を体験できるのか。想像力を刺激する提案であった。優秀案は一転して、現実の都市へとわれわれを呼び戻す。かつてフィリップ・ジョンソンが東京を訪れた時、ビルとビルの狭いスキマからさしこむ光が美しいと語った。ジョンソンも、また林君、石田さんも建築全体ではなく、スキマに着目した。そのスキマにガラスを充填しあって、スキマが別の意味を持ち始めるというところがおもしろい。入選案で注目したのは、箱崎君のヒビの案である。ヒビとは、ガラスにとっては欠点であり、ガラスという物質はヒビ割れることで、崩壊していくのである。その崩壊することにこそ、ガラスのおもしろさがあることに、箱崎君は気づいて、それを作品にした。倉俣の先に、もっとおもしろい表現領域があることを、僕は感じた。

審査委員 山梨 知彦

一見、取組易い顔つきをしつつ、実は建築化しづらいテーマであったせいか、時間切れでアイデアが収束を見ぬままに応募されたもの、アイデアの一応の収束が見られたもの、そして収束したアイデアが美学や表現へと結びつきを見せる領域に至ったものが、明確に分かれていて、審査は極めてスムーズに進行した。それゆえ上位案の決定に際しても、通常アイデアコンペでみられるような、審査初期ではかろうじて引っかかった案が、審査の過程で大きく評価を変え、支持を集める、逆転して上位に位置づけられるといったような、ドラマティックな展開は見られなかった。最優秀の平川案はそういった意味で、テーマを正面から捉えつつも、あいまいなガラス多面体の狭間に、毛細管現象で水を留めるという、だれもが容易に想像できるプリミティブな現象を取り上げながらも、留まった水が見せ始める粘着質な性質、それが生み出す時間感覚、さらには水とガラスが曖昧となりつつ生み出すであろう様相を、味わったことのないテイストを持ったドローイングにまとめ上げ、他からは突出していたように私には感じられた。積み上げられたガラスの塊の間に保水されている様子は、唯一応募案の中で本当に見てみたいと思わせるものでもあった。そういったイメージビリティの高さが、議論を待たずして、最優秀に位置づけられる結果に結びついたのだろう。欲を言えば、この提案にふさわしいコンテキストやストーリーをさらにそこに重ね、社会性をも感じさせる案に仕上げて欲しかった気もするが、多くを求めすぎであろうか。他に、優秀案の林・石田案、箱崎案、中村案、横山・稲川案が印象に残った。

審査委員 藤本 壮介

今回は「曖昧」というテーマゆえ、その「曖昧さ」を直接的に表現しようとした案が多く見受けられた。しかしそれをしっかりと建築の問題として咀嚼し再構築した案の方にこそ、よりいっそうの力を感じた。敷地や状況やスケールを具体的に想像しながらも、さらにそこから場所と時間を超えた提案に届いている案が最後まで残っていた気がする。最優秀賞の平川案は、組積造のようにガラスが積み上げられた荒い壁の隙間が水脈となって、ガラスの壁であると同時に水の壁であるような新しい建築のあり方が提案されている。最初はその美しさに目を奪われ、そして次第に、建築と地球の間、工業製品と自然の間の境界が崩壊していくような静かな驚きに襲われた。ガラスという工業的で無機質なものが、大地そのものへと近づいていくかのような迫力をもった提案だった。優秀賞の林・石田案では、家と家の隙間というありふれた場所が、シンプルなアイデアによって全く新しい意味を持ち始める。街と家、プライベートとパブリック、図と地などのさまざまな対立項が反転し、溶け合い、新しく拡張された生活環境を生みだしている。入選案の中では、黒田・山崎案と箱崎案が印象的だった。黒田・山崎案はシンプルなアイデアが過去、現在、未来の連続と断絶とを鮮やかに浮かび上がらせている。場所に根ざしたリアルな思考と長大な時間スパンを飛び越えていくイマジネーションの力が見事に調和している。箱崎案は、ガラスという素材が持たざるを得ない「ひび」というものをポジティブに捉えることで、建築に時間の概念を取り込むことに成功した。それはまた、建築と人との関わりを生み、過去、現在、未来を繋ぎあわせる。

審査委員 大浴 成一

第21回空間デザイン・コンペティションも、おかげさまで数多くの応募をいただくことができました。関係者各位、ならびに応募者の皆様方に深く感謝申し上げます。応募いただいた作品はガラス質を良く研究した力作ばかりであり、皆様方の熱意に感動しながら審査させていただきました。最優秀賞の平川案「透明な水脈」は、曖昧な不定形のガラスの多面体を曖昧に積み上げ、その隙間にできた曖昧な水脈を雨水が緩やかに伝わり落ちていくのを眺め楽しむ、心休まる豊かな空間を表現した作品でした。普段のものづくりにおいては決まった形を高い精度で作ることを目指している私どもですが、心地よい空間づくりには曖昧な形も求められることに気づかせてくれた提案でした。優秀賞の林・石田案「境界を暈す光の唄」は、住宅間の薄暗い空間に機能をもたせたガラスの扉を設けることで、使われていなかった空間が有効な空間に生まれ変わるといった提案です。昼間は住居内に太陽光を導き、夜は蓄光ガラスが街路灯に、万一の時は弊社の防火ガラス・ファイアライトが延焼を防ぐ、機能ガラスの特性を良く研究した作品で感心いたしました。これらの他、見えないガラスと放射線遮蔽ガラスを組み合わせた黒田・山崎案「記憶の灯籠」、様々なガラス建材の反射に着目した川口案「輪郭を持たない「家」」、ガラス繊維の特性を活かした坂上案「clear/unclear_platform」などが、弊社のガラス建材の新たな可能性を感じさせる作品として印象に残りました。今後もこの空間デザイン・コンペティションを通じて、ガラス建材の更なる可能性を見いだすことに期待するとともに、受賞者の皆様方がこの受賞を足掛かりにご発展されることを祈念いたします。